

加賀の千代女と 朝鮮通信使

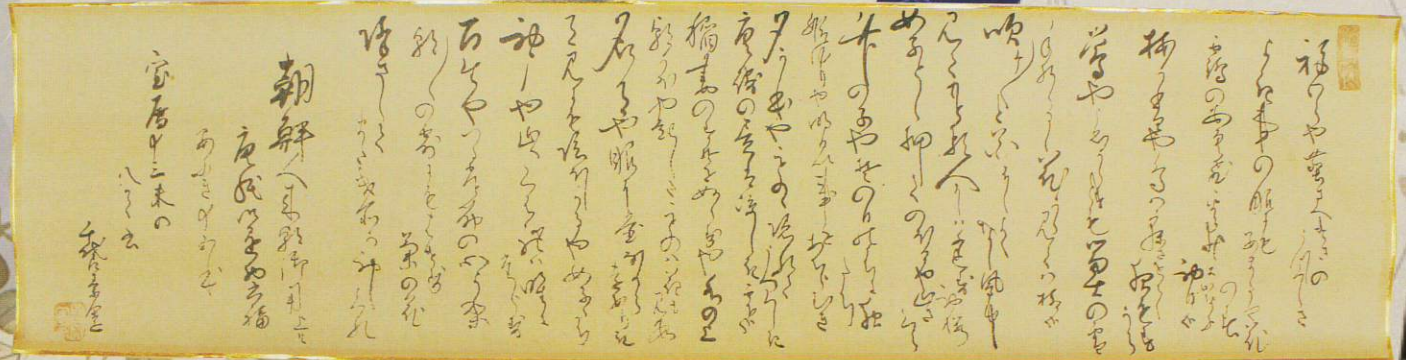


宝暦十年（一七六〇）、將軍に就任した徳川家治の祝賀のため、第十一回目の通信使が宝暦十三年から十四年（明和元年）春にかけて来朝しています。これは江戸に上がった最後の通信使となります。

宝暦十三年八月、六十一歳の千代女は加賀藩の命により「朝鮮人來朝御用上ル」として、六幅の唐紙の掛軸、十五本の扇に自句を書いています。これら二十一点は、使節通過路のうち淀（京都）から新居宿（静岡）までの迎接に関与したと思われる加賀藩により、詩の交換等を通じて使節に贈られたものと考えられます。

このことで千代女の名前は広く日本中に知れわたり、国際俳句交流の先駆として高く評価されています。

▼千代尼素園筆 朝鮮通信使献上句控（白山市指定文化財、画像は複製）



背景画は美泉画千代女肖像

朝鮮通信使とは

慶長十二年（一六〇七）朝鮮国は、豊臣秀吉の行った朝鮮出兵の戦後処理を行うため、日本に使節を派遣しました。以後、徳川將軍の就任の度毎に、祝賀の国書を奉戴して通信使が来朝し、文化八年（一八一二）まで十二回に及んでいます。

通信使は正使以下総勢四、五〇〇人に及ぶ大使節団で、沿道の諸藩と幕府は総力を挙げてこれを迎えています。また、使節には優れた文化人が多く、途中の客館には儒者や文士が押し寄せ、連日、詩画の交換などが行われており、各地に揮毫が残されています。

平成二十九年（二〇一七）国連教育科学文化機関（ユネスコ）は、「朝鮮通信使に関する記録」を世界記憶遺産に登録しました。

※千代女の朝鮮通信使関連資料は、世界記憶遺産の対象には含まれていません。



▲西のぼる画 朝鮮通信使絵巻（部分）



▲千代女朝鮮通信使献上句碑（紫雲園内に設置）

千代女筆

朝鮮通信使献上句 二十一句

The 21 Haiku by Chiyo-jo
Presented to the Korean Delegation

一 福わらや塵さえけさのうつくしき 季語「福わら」
Fortune straw — even the dust looks beautiful this morning

初春を迎えるため、庭に敷いた福わらに元旦の日の光がさしこんできますと、わらに混じったちりさえも、とても美しく見えるのです。初日が輝き、賓客を迎えるための庭の福わらを照らしています。

二 よき事の眼にもあまるや花の春 季語「花の春」
Spring arrives — I recall happy memories from the past

初春が巡ってきて、床には蓬莱が飾られ、目出度い中にも、旧友と語り合っています。昔の様々のことが思い出されます。そして、良い事が数多くあり、一目でどれだけといふことができないほどです。

三 鶴のあそび雲井にかなう初日哉 季語「初日」
A crane dances in the New Year's sky — I was able to see the sunrise

ものみな改まる元旦の空は、一年の初めにふさわしく晴れ渡っています。鶴は大空を舞い、日の出を拝むことができました。この一年、病気をしないで元気でありますように。

四 梅が香や鳥は寝させて夜もすがら 季語「梅が香」
The plum's fragrance makes the birds sleep — the night falls

昼は鳥のさえずる声を聞き、心も自然とうきうきして静かに梅が香るのも気がつかないのです。夜も更けてくるに従って、辺りは鳥の鳴き声もなく、ただ梅の香りだけです。梅が鳥たちを夜静かに眠らせているのです。

五 鶯よこえからすとも富士の雪 季語「鶯」
Even the nightingale's voice gets hushed — snow still on Fuji

小川には水車がコトコトと回り続けています。この水しぶきに誘われてか、鶯が「ホーホケキヨ」と囀り、時として「ケキヨケキヨケキヨ」と続け様に鳴く時期になると、大体の雪は解けるのですが、声をからす程鳴いても、さすがに富士山の雪はまだまだ解けそうにもありません。

六 手折らるる花から見ては柳哉 季語「柳」
Picking small flowers, I notice the beautifully leafy willow tree

日頃はついつい見過ごしてしまつたのですが、よく見ると、小さな花が咲いています。早速その花を手で折って、ふと浅緑で新しい葉の美しい枝垂れた柳を見つめました。

七 吹け吹けと花によくなし鳳巾 季語「鳳巾」
Wishing for winds to lift our kites, though they may harm the trees' blossoms

晴れ渡る早春、親子は鳳巾を天高くあげようとしています。しかし、風があまり吹いていません。どうか風よ、吹いてくれと願う一方、花の咲く木々に鳳巾がひっかかっではよくありません。

八 見てもどる人には逢わず初桜 季語「初桜」
A solitary walk home from the year's first cherry blossoms — perhaps others use other roads

春のどかな一日、今年初めて咲いている桜の花を見つけました。しかし、美しい花の薄紅を見て楽しみ、帰る人々の姿は見えません。「行き」と「帰り」の道は違つたのでしよう。

九 女子どし押ししてのぼるや山ざへら 季語「山ざへら」
We women make our way up a steep mountain, and are delighted by the beautiful cherry blossoms

女性の仲間同士で、山野に桜の花を訪ねて遊び歩くことにしました。山路は険しく、互いに励ましながら山の頂上にたどりつき、一重で紅を帯びた優雅な山ざへらは、私たちを楽しませてくれました。

十 竹の子やその日のうちに独りだち 季語「竹の子」
Rain falls on the morning's bamboo shoots; by evening, they have grown

早朝、竹やぶへ行ってみますと、よきよきと地面の上に顔を出している若芽の竹の子を見つけました。その喜びもつかの間、降雨があり、雨が止んだ夕暮れ時の竹の子は、ひとり立ちをしていました。

十一 姫ゆりや明るい事をあちらむき 季語「姫ゆり」
The star lily in the garden gazes into the distance, indifferent to the lively house

朝の庭に、濃赤色でいかにも優しい姫ゆりが咲いています。その家には明るい話題があったのに、姫ゆりは知らんぷりして家の方に向かず、白山連峰の方に向いています。

十二 夕がおやものの隠れてうつくしき 季語「夕がお」
Moon flowers — the beauty of hidden things

昼のむし暑さも去って働いていた人も家へ急ぐ夕暮れ時、薄暗い家の中は、古いすだれや洗濯物などが軒に吊るされている影に隠れて、真白い夕顔の花だけがくつきり浮かび出ていて、家全体がしめやかに美しく見えます。

十三 唐崎の昼は涼しき雲哉 季語「涼し」
Noontime dew drips from Karasaki Shrine's pine trees — I feel the coolness

伊吹山や比良山から琵琶湖に吹いてくる夏風が、唐崎の松の枝をゆらす唐崎神社に昼頃着きました。雨上がりなので松の木々から風とともにしずくがしたり落ち、涼しさを感しました。

十四 稲妻のすそをぬらすや水の上 季語「稲妻」
Lightening gets wet — water's surface

暗い夜に、ぴかりと稲妻がきらめいて、その光が一瞬さつと白く水面に映るのを見ました。その稲妻は水の上を走って、その裾をぬらしたのでしょう。

十五 朝がおや起こしたものは花も見ず 季語「朝がお」
After blooming, the morning glories in the garden fall to the ground — I cannot bring myself to look

庭先に色とりどりに咲いている朝顔も、盛りを過ぎて地面に張っています。その花を起こしたものは、かわいそうなので見ないことにしています。

十六 名月や眼に置きながら遠ありき 季語「名月」
Full moon — keeping it in my eyes on a distant walk

空には中秋の明月が美しく照り、その美しく冴え渡った名月に惹かれて遠回りをしながら旅をしています。旅する者には、仏の光をはっきり自分の心に受けながら、自由に旅できる喜びを持っています。

十七 月見にも陰ほしがるや女子たち 季語「月見」
The moon is so beautiful, the women say they'd like to live there if it had shade

親しい女たちと月見のため、夕方、家が集まりました。雲で空が覆われた後、雲が切れて名月が見え始めました。名月の美しさに、女たちは陰があつたらそこに身を寄せたいといふのです。

十八 初雁や山へくばれば野にたらず 季語「初雁」
First wild geese — if more in the mountain less in the field

今は初雁はまだ数が少なく、山にも野にも両方にその姿を見るところではありません。秋の趣を添える初雁であるのに、初雁を山へやってしまつと、今度は野が物足りなくなり淋しい感じがします。

十九 百生やつるひと筋の心より 季語「百生」
A hundred gourds from the heart of one vine

百生とは一本の蔓でひょうたんが多く実をつけることです。元をたれば全て一すじの蔓から生まれます。人間も心の持ち方ひとつで鬼も生まれ、仏も生まれるということ。心といふものは何よりも大切です。

二十 朝々の露にもはげず菊の花 季語「菊の花」
The dew sparkles in the morning — the chrysanthemum's color is always beautiful

加賀平野が冷え込み始めた早朝、香りの良い菊の花に露の玉がいくつも降りて光っています。そして、菊の花は少しも色を変えず、美しく咲いています。

二十一 降りさしてまた幾所か初しぐれ 季語「初しぐれ」
As autumn becomes winter, the drizzle stops — even the rain is busy

秋から冬になる頃、時々、ばらばらと降る雨が降りかけて、またどこかへ行ってしまいました。あちらこちらと、初しぐれも忙しいです。旅を続ける私には風雅なことです。

句解説の参考図書 山根公著「千代女季の句」「加賀の千代女五百句」
※一部現代語表記に改めてあります